

神郷亀塚古墳を見学して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯尾, 和広 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2877

塚古墳（以下亀塚古墳と略す）は町の東端部に位置し、西側には200m隔てて弥生時代後期から鎌倉時代に至るまで栄えた湖東地域の中心的な集落、斗西（とのにし）遺跡・中沢遺跡が広がっている。中でも斗西遺跡は庄内式～布留式古段階に東海・北陸など他地域の土器が多量に出土しており、古墳との関係を考える上で興味深い。また古墳の東側には小川を挟んで式内社の乎加（おか）神社が近接している。この神社は、時代は新しいそうだが本殿に独立棟持柱を採用している。独立棟持柱をもつ建物は池上曾根遺跡などで最近注目されており、実物を目のあたりにすることができる。また鳥居の前にそびえる巨大な岩の燈籠や鬱蒼と生い茂る木々によって、神秘的な空間を作り出しており、どこことなく気品を感じさせてくれる。



神郷亀塚古墳での説明風景

神郷亀塚古墳を見学して

修士1年 湯尾 和広

神郷亀塚古墳は滋賀県神崎郡能登川町神郷に所在する。昨年度の調査によって初期の前方後方墳と判明し、一躍有名になった。今回、見学実習の一環で発掘調査現場を見学する機会を得ることができた。調査進行中であるにもかかわらず快く見学を承諾し、懇切丁寧に説明して頂いた能登川町埋蔵文化財センターの植田文雄・西邦和両氏に感謝申し上げたい。

能登川町は滋賀県の湖東地方に属する。北に愛知川が流れ、琵琶湖へと注いでいる。西は内湖である大中の湖干拓地に面し、南境には安土城がそびえるなど交通の要衝でもある。神郷亀

塚古墳は従来、地元では「亀山」とよばれ乎加神社の社地として大切に保存されていたそうである。現在の墳丘は周辺を耕作等によって削平されているが、比較的良く残っている。調査する以前には全長約28mの前方後円墳として認識されていた。しかし昨年範囲確認調査によって周濠が発見され、全長35.5mの前方部を南西方向に向けた前方後方墳であることが判明した。さらに後方部の主体埋土から出土した土器（庄内式古段階・3世紀前半）により、平地にあって高塚をもつ初期の古墳として注目されることになった。

乎加神社において事前説明を受けた後、神郷集落の間を抜けて古墳へと向かった。中世以来変わらぬ佇まいを残す集落という。1500年以上にわたって古墳を守り続けてきた人々が住んでいると思うと感慨もひとしおであった。

発掘現場に到着すると、周濠部の把握を目的とした調査が行われていた。墳丘の周辺は、ところどころ表土層の剥がされた部分があり、墳

丘と周濠部分での明らかな土色の違いを認識することができた。また後方部の東西では、それぞれ周濠部分をトレンチ状に掘り下げている最中であった。周濠は墳丘に沿って凸型を呈しており、後方部側が広がっている。後方部の最も大きな部分で幅12m、前方部で幅2mをはかり、深さは後方部で現在掘り進めている段階で1.3m以上、との事である。トレンチを覗くと、4～5枚の土層が堆積しているのが見えた。上層からは7世紀中頃のものと思われる須恵器が見つかり、周濠の埋没時期はほぼ判明したが、肝心の最下層からはあまり遺物は見つかっていない、という話であった。また東側の周濠内でピット状の遺構が検出されていた。トレンチ断面部にもその痕跡が見られ、周濠を点々とピットが取り囲んでいた可能性も考えられる。

古墳の調査経過を説明する中で、植田さんは亀塚古墳と斗西遺跡・平加神社の興味深い関連性を述べておられた。亀塚古墳の被葬者は斗西・中沢集落の発展に大きく関与した有力者であっただろう。斗西遺跡で見つかった土器・木器・石製模造品などを使った水辺祭祀の遺構は、遺跡の東側にあつて亀塚古墳を望むことのできる位置にある。亀塚古墳は祭祀の対象となつたのではないかと。また亀塚古墳の周濠が最終的に埋没する時期を境にして平加神社が成立したのではないのだろうか。という非常に魅力的な考えであった。亀塚古墳に接して暮らしていたこの地域の人々の生活の一端を浮き彫りにするものであろう。

ここで気のついたことがいくつかある。まず亀塚古墳の立地である。斗西集落から200m離れたこの地を墓地と定めたのには、おそらく集落との隔絶性を持たせる意味合いがあつたのだろうが、亀塚古墳の後方には和田山がそびえている。この丘陵を利用しなかつたのは、平地に築造する必要性があつたからであらうか。

近年、前方後方形周溝墓とよばれる遺構が滋賀県・愛知県で多数発見されている。滋賀県では庄内式古段階ごろ湖北・湖東地方に出現し、その後湖南地方（野洲川流域）に集中して見られる（註1）。これら周溝墓の中には亀塚古墳同様に墳丘をもつものもあつただろう。いずれにしても平地に築造する前方後方墳の例である。さらに亀塚古墳と隣接する地域に広がっていることも見逃せない。対して最近調査されているほぼ同時期の前方後方墳、湖北地方の小松古墳や湖西地方の熊野本6号墳は丘陵上に造られている。墳墓立地の選択には地域性があつたのだろう。

また、亀塚古墳の墳丘が残っていること、その母体集落である斗西・中沢集落が近接することからいろいろと考えを巡らすことができる。例えば斗西集落から亀塚古墳を望んだ場合、常に左に後方部をもつ形に見えていたことになる。このことから亀塚古墳では、ひょっとすると前方部ではなくて「側面」を正面として意識していた可能性もある。前方後方（円）墳を最も大きく感じるのは、「側面」方向から後方（円）部と前方部の両方を見た時であり、逆に前方部から望む場合は、巨大な古墳になるほどその大きさは実感しにくいのではないだろうか。今後、古墳の正面観を再考してみたいと思う。

さらに亀塚古墳は、版築による墳丘の造成や構築墓壙など一般的な「古墳」に通有な築造方法をとっている可能性もある。箸墓古墳の築造以後の墳墓を古墳とする現在の流れの中では、庄内式期の築造と考えられる亀塚は「古墳」とは呼べないことになる。近年次第に数を増やしつつある庄内式期の「古墳」とともに考え直す必要があるだろう。

今回の亀塚古墳の見学を通じて、色々と考えさせられる所が多く、意義のあるものであつた。亀塚古墳は来年度、主体部の発掘に取り掛かる予定だと聞く。また新たに我々の予想しない事実が次々と判明することであらう。調査の結果に期待をしつつ静かに見守っていくことにしたい。

註

- 1) 佐伯英樹1999「前方後方形周溝墓」『滋賀考古』第21号 pp.41~46
宮崎幹也1995
「近江地域の前期古墳の動向 近江の前方後方墳を考える」『前方後方墳を考える』第3回東海考古学フォーラム pp.229~232